

「落語と私」と祖父と私

月報編集長
伊藤 玄二

橘百圓師匠の「落語と私」が終了しました。

木と暮しのふれあい展がきっかけで小疇さんの出演する「小天狗よったり会」に誘われ、毎年楽しませてもらっています。

落語をテーマに月報の読み物をと、お願いしたところ快く引き受けてくださいました。

書ける方だと確信していましたが、それにしても連載36回！引き出しの大きさと深さに驚嘆しました。馬生の評価、談志評など同感するところが多く、楽しく読みました。ありがとうございました。

私の母方の祖父長井愛爾は三重県の紀伊長島町という山と海しかない町の生まれで、戦前は東京で教師をしていたようですが、私が物心ついたころは郷里で小さな本屋を営んでいました。

問屋組合の理事を長年務められた山市木材生産の長井さんも同じ町の出身で、屋号を梅屋という大山林家です。地元の邸宅にはテニスコートが備えられています。

同姓で遠縁の遠縁ぐらいにあたるらしく、同窓ということもあって私も長井さんには親しく目をかけて頂きました。

孫の私から見ても、祖父は経済には関心の薄い呑気な趣味人でした。哀耳と号して(俳号を考えている時、たまたま中耳炎で耳だれが出ていたとか)句会を主宰し、地元紙の俳句欄を長く担当していました。漁の季節にはイカ釣り船が見える高台に、私も好きな句「いか火燃ゆ 浦々沖を 同じうし」の碑が残されています。

さてここからが本題です。

そんな祖父は私の母親が三人娘の長女だったこともあり、年に数回上京の時は我が家に逗留するのが常でした。楽しみにして決まって行くのが三越落語会。小学校高学年になると私がお供をするようになりました。まあ伝統芸能の手ほどきをしてやろうくらいの気持ちだったのでしょう。

母親には「玄二を連れて行くのに廓の嘶なんかされると困るな」と言っていたようですが、幸い三越ではそんな嘶はかかりませんでした。

60年も前のことなので記憶違いもあると思いますが、部分的に覚えていることをあげてみます。

当時まだ二つ目だった歌奴(後の三遊亭圓歌)朝太(後の古今亭志ん朝)が前座を務めていたこと。歌奴は「授業中」ですでにブレイクしていましたが、師匠連の邪魔になってはと、モーパッサンの短編からと断って地味な新作を一席。嘶の中身は覚えていませんが、その後に買ったモーパッサンの短編集は今も本棚にあります。

三遊亭金馬は自動車事故の後で正座が出来ず、板付き(幕を一度下げて上がった時には座についている)で、釈台を使っていました。噺は「藪入り」だったと思います。

今から思うと貴重な体験になったのが桂三木助。演目は名高い「芝浜」ではなく「死神」でした。子供にも分かりやすい噺なので印象が強かったのかも知れません。三木助は早逝したので聞いたことがある人はもうあまりいないのではないかと思います。

そんな風に道がつき、大学生になってからは友人と、時には一人でも落語を聞きに行くようになりました。今はない人形町の末広にも行ったことがあります。

何回か通ったのは昭和60年まで続いた東横落語会。ある年の暮れ、年忘れ三人会として名人上手と言われる大看板三人が二席ずつ語る、とても豪華なまさにご馳走と言える企画がありました。

本来なら桂文楽、三遊亭圓生、柳家小さんの三人だったと思いますが、その年に文楽は高座で絶句「申し訳ありません。勉強し直して参ります。」で引退していました。文楽に代わって抜擢されたのは金原亭馬生。

世間的な愚兄賢弟(弟は古今亭志ん朝)の評は耳にしていますが、それまで聞いたことがありませんでした。噺は「松曳き」と「明烏」。大熱演で、出番を待たされた圓生がチクリと愚痴ったのを覚えています。素晴らしい出来で一度でファンになりました。馬生、志ん朝の兄弟は病に倒れなければ共に人間国宝になっていたのではと、とても残念です。

落語家はお酒や遊びが過ぎるのか? 病気で早く亡くなることも多く、もう一人残念だったのが春風亭柳朝(小朝の師匠)。江戸っ子の匂いのする粋な噺家でした。志ん朝との「二朝会」はとうとう行きそびれました。

祖父のお供がきっかけとなり、今でも落語を楽しんでいます。今月は小朝の独演会(当代一と思うがあの金髪はちょっと)の予定があります。

コロナ禍でなかなか思うにまかせませんが、また木材会館で落語を聞ける時が来ることを楽しみに待ちたいと思います。

橋百圓師匠がライフワークにされている「小天狗よったり会」。昨年は新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、規模を小さくして開催されたそうです。今年は、通常規模に戻し、会場内が笑いの渦に巻き込まれるとよいです。また、「落語と私」が組合月報に復活する日が来るとよいですね。

(組合事務局・高輪)